

中国語の移動表現

呉, 念聖

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

111

(開始ページ / Start Page)

167

(終了ページ / End Page)

179

(発行年 / Year)

2000-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004827>

中国語の移動表現

呉 念 聖

中国語の移動表現文を分析するとき、とかく方向補語⁽¹⁾という文法用語がよく使われる。まさにその用語が示しているように、現在、中国語語学界では一般に、移動の方向性を移動表現の最大の特徴としてとらえている。

本稿では移動そのものを立脚点として、中国語の移動表現を文法的に記述することを試みた。つまり、中国語の特色もさりながら、なによりも外国人学習者にとってわかりやすい中国語の法則は何かということ、筆者は求めているのである。

—

1. 移動の成立

どの言語においても、移動表現は極めて重要かつ基礎的な表現である。それは移動が最も重要かつ基礎的な自然・社会現象の一つであるからだ。

物理現象としての移動について、つぎのように定義することができる。

移動とは時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化である。⁽²⁾

したがって、移動体・位置変化・移動時間は移動三要素といわれている。しかし、言語で移動を表現するとき、その三要素をすべてならべだすわけではない。そして言葉の種類によって表現の方法も違う。

本稿では、動作主としての移動体の移動にしぼって論を展開させていくつもりなので、移動現象を移動体の行為の結果としてとらえ、その行為の前後に位置変化の有無を移動存否の判断材料とすることにしている。

位置変化の有無を計る基準物は移動体の移動軌跡を記する場所で、その場所は普通、移動の起点・通過点（通過部分）・到着点の三点に集約される。

方向性は移動現象を伴う要素であり、移動の属性である。移動する場合、当然一定の方向に向かって動くに違いない。問題は移動表現の文中で移動の方向性がどう表されるかである。例えば、

他出国了。／彼は出国した。

の文中の「出」という動詞は、「内から外へ」という移動方向を包入しているので、たとえ具体的な到着地を示さなくても（示せないか）「彼は国外に行った」とか「彼は外国に行った」とかというふうに理解できる。

ただ方向性を決めるのは客観的な基準物のみならず、話者の視点が入ってくる場合もある。

そのほかに、移動した距離、或いは移動した時間を示すことも移動という事実を伝える手段となる。ただその表現が可能かどうかは、用いられる動詞の性格にかかる。

つまり、移動表現の必要から生まれた動詞は、いったん生まれるとその動詞自身が移動への関わり方をもつようになる。そのため、筆者は個々の中国語移動表現に関わる動詞を考察するのではなく、移動表現を大観することを意図するものであるが、一方、動詞自体が移動表現の諸要素を包入している以上、一定の数の動詞を例にし、分類整理していくことは、論を展開する上では不可欠である。

2. 移動の軌跡と一点顕在法

ここでいう点とは、移動軌跡の起点、通過点、到着点の点である。文表現の中で、この点は場所で表れる。例えば、

- 他来上海了。／彼は上海に来た。
- 他去北京了。／彼は北京に行った。
- 他回家了。／彼は家に帰った。
- 他上车了。／彼は電車に乗った。
- 他下乡了。／彼は田舎に行った。
- 老师进教室了。／先生は教室に入った。

の中の場所はみな到着点を表している。本稿では、これらの、到着点を補述する特性のある動詞を<到着型>移動動詞と称する。

ただここでいう補述とは、必ずしも動詞の後に付けるという意味ではない。例えば、

- 我家来了一个客人。／我が家にお客さんが一人来た。
- 那个连进了五个新兵。／あの中隊に新兵が五人入隊した。

のように、到着点は文頭に置かれていることもある。

<到着型>移動動詞の中で、「来」と「去」は話者の視点にも関係するので次

の「3. 移動の方向性と話者の視点の介入」で検討することにする。

ほかに、

他出国了。／彼は出国した（国を出た）。

他下车了。／彼は下車した（電車から降りた）。

のように、起点を示す移動表現もある。＜到着型＞に対し、ここに用いられた動詞を＜出発型＞移動動詞と呼ぼう。

さらに＜通過型＞移動動詞には「过」がある。

部队过桥了。／部隊は橋を渡った。

「过」は「通過する」という意味で、補述したのは通過場所である。

以上のような移動動詞を文中に用いたとき、移動軌跡の一点だけを補えば、移動表現は成立するのである。

それと同時に、その一点は基本的には必要である。例えば「他出了。」とはいえない。「他出国了。」といわなければ文は成立しない。

ただ「请进」のような命令文は例外である。⁽³⁾

また「他出去了。」と表現してもよい。それは「去」の助けを受けたからだ。理由は次の「3.」で述べよう。

中国語の移動表現に際し、移動動詞を用いると同時に、移動軌跡の一点を顕在化することが必要だと思われる。このような表現法を筆者は「一点顕在法」と略称することにする。

3. 移動の方向性と話者の視点の介入

移動はとうぜん方向性を伴うことと、移動動詞が方向性を包入するか否かということとは、まったく異なる問題であると思う。

現在、大方が「过」を方向補語（動詞）と言っているが⁽⁴⁾、筆者はその見方には首肯しかねる。確かに「过」という動詞は移動を表しているが、しかしどういう方向に向かって移動するかを表していない。

上の例に示したように、＜出発型＞移動動詞も具体的な目的地の補述できるという特性をもっていないが、しかし方向だけという意味での方向性を包入していると認められる。起点より低い方へ移動する「下」や、内を起点に外へ移動する「出」は、そのような特徴をもっている。⁽⁵⁾

到着点が補述できる＜到着型＞移動動詞なら、概して方向性を包入している。

ただ「来」「去」の場合はもう少し複雑になる。例えば、

他来了。

你去了没有？

の場合は、到着点が表わされていない。にもかかわらず、移動表現は成立している。それは話者の視点が介入しているからである。前者の例では、「来」の移動方向には、話者の視点があった。後者の例では、「去」の移動方向の反対方向に、話者の視点があったわけだ。つまり話者の視点が「来」「去」の基準物になっている。

また

他来学校了。

你去学校了没有？

の前者の例では、話者の視点は命題中の到着点に置かれていると考えられる。後者の例では、命題中の到着点（第二基準物）は話者の視点（第一基準物）にもっとも遠いところにあって、命題に言及されない起点は視点と到着点の間にあると考えられる。また話者の視点は作中人物の視点と重なるケースもあろう。

この「来」と「去」を本稿では主観移動動詞と呼ぶ。

「来」や「去」は上文でとりあげた他の移動動詞（主観移動動詞に対して客観移動動詞と呼んでもよい）の後につけて複合動詞をつることができる。

他回去了。

のように文中、移動軌跡が現れなくても話者の視点が基準物になっているから文は成立する。また

他回家去了。

のように移動軌跡の基準物（第二基準物）があってもよい。

モダリティ論の観点からこの「来」「去」は、「命題めあてのモダリティ」の役割も果たしているようである。⁽⁶⁾

4. 二つの到着点：発話時の移動体の到着点と移動方向上の到着点

まず、

他回家了。

という文をもう一度考えてみよう。この文は「彼は家に帰った。」という意味になるが、しかし同時に「彼は家に到着した。」という意味にもなるだろうか。

喂，吴老师在吗？／もしもし、呉先生はいらっしゃいますか。

对不起，他已经回家了。／すみません、呉先生はもう家に帰られました。
 是吗，我刚才给他家打了电话，说是没回来。／そうですか。さきほど呉
 先生のお宅にお電話をしたとき、まだ帰っていないと言われたのですが。
 大概还在路上吧。／たぶんまだ途中にいるでしょう。

という対話を吟味すると、「他回家了。」という文は必ずしも「家に到着した」という意味にならないことがわかる。発話する時点で、話者が表現する（表現できる）移動体の最終位置は発話時移動体の到着点と解されるが、しかし移動自体はまだ継続中かもしれない。中国語の移動表現における到着点は普通、ここの「家」のように、移動目的地即ち移動方向上の到着点を意味するのである。

はっきりと「家に到着した」を表したい場合は、「他到家了。」か「他回到家了。」と言えばよい。

むろん、発話時に移動体はすでに移動方向上の到着点までたどりついたという可能性もある。

喂，是吴老师家吗？／もしもし、呉先生のお宅ですか。

是啊。您就是刚才打电话来的小林吗？／そうです。さきほどお電話くださった小林さんですか。

是的。对不起，吴老师已经回家了吗？／はい、小林です。すみません、呉先生はもう帰宅されましたか。

他已经回来了。请稍等。／もう帰ってきました。ちょっとお待ちください。

の場合なら、移動体はすでに移動方向上の到着点まで移動していったように理解した方がよい。

一方、

老师进教室了。

のような、移動動詞「进」を使う移動表現なら、発話時移動体の到着点は移動方向上の到着点に等しい。その理由は通過点の距離にある。一定の長さを保有する通過点という移動軌跡の内容を包入した「来」「去」「回」などの移動動詞と違って、「进」に包入された通過点はほとんどゼロ距離である。

総じてみれば、移動表現に示された到着点は、発話時移動体の到着点ではなく、移動方向上の到着点としてとらえられたほうがよいと思う。以下、とくに説明がなければ「到着点」はすべてそういう意味として使われている。

5. 通過点のとらえ方

もう少し通過点の長さや移動動詞との関係を見てみよう。

车过国境线了。／車は国境線を越えた。

火车过隧道了。／汽車はトンネルを通った。

火车进隧道了。／汽車はトンネルに入った。

火车出隧道了。／汽車はトンネルを出た。

ここでは「过」の通過点は「国境線」か「トンネル」となる。＜通過型＞移動動詞の使用は通過点の長さや無関係であることがわかる。

一方、ここの「トンネル」は「进」の到着点と、「出」の起点と見なされる。「进」と「出」は両者の移動方向が正反対であるが、同じく「内」を基準物にしている。つまり、つまるどころ、その通過点はその「内」を表す場所の囲いか「内」と「外」を分ける境である。つまりその囲いまたは境こそ「进」「出」の基準物となる。「トンネル」を例にすれば、「トンネル」全体ではなく「トンネル」の「出入口」を過ぎたかどうかという事で「进」「出」という移動の存否を判断することになる。

実は直接に出入口を表す「門」を使って「进门／門に入る、中に入る」または「出门／門を出る、出かける」のような慣用表現もある。

この「門」を「内」の一部としてとらえるならば、依然として「进」を＜到着点＞移動動詞と、「出」を＜出発型＞移動動詞と認められる。もし「門」を通過点としてとらえるならば、両者を＜通過型＞移動動詞と見なすこともできよう。

「上」や「下」に関しても似通った慣用語がある。例えば「上山／山を上る、山の上へ上る」「下山／山を下りる、山の上から下りる」または「上楼／楼を上る、楼の上階へ上る」「下楼／楼を下りる、楼の上階から下りる」のように、筆者はそれぞれ日本語訳を二つつけたが、おそらく後者は本来の意味だが、しかし一般に前者と表現される。そうすると、ここの「山」を「山道」として、「楼」を「楼の階段」として解釈することができる。したがって、ここの「山」や「楼」を通過点としてとらえることも可能である。

6. 移動軌跡表現の拡張

次の表を見てみよう。

動詞	起点		通過点		到着点		参考例
	視点	用例	視点	用例	視点	用例	
来		从北京来 来自北京		从这条路来	●○	来(上海) 到上海来	来到(上海) 到来
去	●	从北京去		从这条路去	○	去(上海) 到上海去	
回		从公司回家		从这条路回家	○	回家	回到家
上			△	上山 从这条路上山	○	上车	上到车上
下				从这里下水	○	下水	下到水里
下	○	下车 从车上下去	△	下山 从这条路下山			
进		从外面进去	△	进门 从一号门进	○	进教室	进到教室里
出	○	出教室 从教室里出去	△	出门 从一号门出			
过			○	过桥 从桥上过			

ここの「視点」とはつまり移動基準物のこと、三つの内容を含む。●は話者の視点を意味する。○は客観的参照物を意味する。△は通過点に対するとらえ方によって参照物にもなれることを意味する。

表の通りに、「从」「自」などの語彙を加えれば、<到着型>移動動詞を用いた文では、起点か通過点を加えるができ、移動軌跡の表現が広がる。もし「经过」⁽⁷⁾を使えるならば、三点を同時に登場させることもできる。

小李从他家经过这条路来我家。／李さんは彼の家からこの道を通って家に来てくる。

しかし<出発型>や<通過型>の移動動詞を用いた文では軌跡点の追加表現はできない。

他从教室里出来了。／彼は教室の中から出てきた。

他从车上下来了。／彼は電車から降りてきた。

他从桥上过去了。／彼は橋を渡っていった。

の文中に表れた場所は結局、

他出了教室。

他下车了。

他过桥了。

の文中に表れた場所と同じ、起点か通過点を示しただけで、新たな軌跡の提供はない。

「来」や「去」に先んじて使われた「到」の文もそうである。

他去学校了。

他到学校去了。

という二つの文の意味は同じである。後者は「到」を増したが、しかし移動軌跡を追加したわけではない。

注意すべきは移動動詞の後につく「到」は、「へ」ではなく、「到着する」「まで」の意味になる。この「到」を移動動詞としてとらえる意見もあるが⁽⁸⁾、本稿ではそういう見方はとらない。

二

1. 移動様態

動物である動作主の移動は動作主の意思による行為であり、動作主の身体能力の表れでもある。その意思や能力によってさまざまな移動様態が表れる。中国語の中には「走／歩く」「跑／走る」「跳／跳ぶ」「飞／飛ぶ」「爬／這う」「游／泳ぐ」など、いろいろな角度から移動様態を描く動詞がある。これらの動詞を本稿では移動様態動詞と称する。

ただ移動はあくまでも、移動しうる能力でなく移動した確たる結果である。例えば

· 他走得很快。／彼は歩くのが早い。

という文は、「彼は歩くのが早い」という意味で、その人の「歩く」という移動方法を使って移動するときの能力を表現したもので直接に移動を表現したものとは言いがたい。

2. 方向付け

移動様態動詞は方向性を包入しない。移動を表現するために、方向性つまり移動目標を明らかにするのが一つの方法である。例えば、

从里往外走。／中から外へ行く。

孔雀朝南飞。／孔雀は南へ飛んでいく。

走向何处？／何处へ行く。

のように、「往」「朝」「向」などの語彙の力を借りて「歩く」や「飛ぶ」を移動させた。

面白いことに「向」「朝」などは、実は方向性をもつが、移動性をもっていない動詞だった。⁽⁹⁾

枪口向着谁？／銃口を誰に向けるか。

这个房间朝南。／この部屋は南向きだ。

しかし、方向詞として到着点を導き、移動様態動詞を助ければ、文全体が移動表現になる。

3. 移動動詞との結合

次のように

他跑出教室去了。／彼は走って教室を出ていった。

移動様態動詞を移動動詞の前において移動を表現するパターンは中国語の中では多い。

さらに「从」または「向」などの語彙を借りれば、軌跡の表現を拡張することもできる。

他从学校向车站跑去。／彼は学校から駅へ走っていった。

从对面走过来一个人。／向こうから一人がやってきた。

4. 移動様態動詞の両面性：移動様態を描く側面と移動を描く側面

ここではとくに「进」と「走」の二つの動詞をとりあげて見たい。

筆者は、「进」という動詞に非常に興味がある。上文ではすでに「入る」の意味をもつ移動動詞「进」を見てきたが、到着点或いは主観移動動詞が後続しなければ「进」は「進む」の意味になる。実際、現代中国語の中では、「進む」の「进」は使い方がかなり限られている。例えば、

不进则退。／前進しないと後退することになる。

进一步，退两步。／一步進んで二步後退した。

向前进。／前へ進む。

棋盘上红车向前进了一步。／盤上では赤方の「車」は前へ一步進んだ。

熟語なら数は少なくない。動作主の移動を表現するものだけでも「前进／前進する」「挺进／挺進する」「进步／進歩する」「行进／行進する」「南进／南へ進む」「并进／一緒に進む」などがある。

普通はこの「进」を「前へ移動する」と定義してある。それに関して筆者のもつイメージはいささか異なる。そもそも「前」を決める基準は何かを問わなければならない。筆者は移動体の向き（移動の向きではない）に注目し、「移動体が起点を背にして離れていく」という言葉で「进」を描きたい。上下する意味をもつ「上」と「下」は自然界の天地というような客観的な参照物を基準とし、出入りする意味をもつ「进」と「出」は「内」となる場所というような客観的な参照物を基準としている。しかし「進む」意味をもつ「进」は、移動体を基準にし、移動体が移動方向に顔を向けて移動するところから、前へ進むという結果になったわけなのだ。そういう意味で「进」ははっきりした方向性をもっているとはいえない。移動の起点があっても方向性を持たないという点で他の移動様態動詞と変わらない。

よく考えたら、移動体が移動方向に顔を向けて移動するのは極普通で或いは正常な移動姿勢（様態）というほかない。あえてその様態を表現するのが「进」である。あまりにも当たり前のことしか表さないために、他のさまざまな特徴のある移動様態動詞より使い道が狭まったのではないかと思われる。

一方で「进」はまぎれなく移動性を有している。そのためか他の移動様態動詞のように移動動詞と組むことはできない。

ついでに、「退く」の意味をもつ動詞「退」を確認してみよう。

上述した「进」についての私見をうけて、「退」は、起点に顔を向け移動方向に背を向けての移動と定義することができよう。しかしながら「退」は完全に「进」の反対語にはなっていない。普通の移動様態を表す「进」に対し、「退」の移動姿勢（様態）は明らかに普通ではない。そのために「退」のもつ移動様態の側面が非常に大きく働いており、「进」と違ってほとんどの移動動詞と組み合わせることができる。

次に「走」を見てみよう。実は「歩く」という移動様態を表す「走」は用法によって移動の側面が大きく作用する場合もある。

客人走了。／お客さんは帰りました。

苍蝇飞走了。／ハエは飛んでしまった。

小偷逃走了。／泥棒は逃げた。

ここの「走」はみな、ある場所を離れるという移動の意味をもっている。この場所は移動の起点と見なしてもよいが、方向性は示されていない。

それは「歩く」はあまりにも一般的な移動様態を表しているから、様態の側面が埋没され、＜出発型＞としての側面が突出されたことに起因するのかもしれない。

ほかに「跑」「飞」のような移動様態動詞も、「走」の使い幅には及ばないが、方向性のない＜出発型＞移動動詞として使える。例えば、

兔子跑了。／ウサギは逃げた。

敌人逃跑了。／敵は逃げてしまった。

小鸟飞了。／小鳥は飛んでいった。

三

1. 移動距離

移動様態動詞を用いた文は、移動距離を補えば、移動した事実を伝えることができる。

他走了两步。／彼は二歩歩いた。

这支队伍进了五公里。／この部隊は五キロ進んだ。

移動動詞を用いた文は、移動軌跡を記すことを特徴とし、並びに移動距離を表すことはできない。

2. 移動時間

移動時間の表現も距離の場合に似ている。

他（走路）走了两个小时。／彼は二時間歩いた。

他游了半天。／彼は長いこと泳いだ。

のように、移動様態動詞は時間を後続させることができる。よって移動したことを表現する。

移動動詞の場合はどうだろう。確かに移動動詞を用いた文では時間を補述することができるが、しかしその時間は移動にかかった時間ではなく、移動終了

時から話者が発話する現在までの時間である。

那个留学生来了三个月了。／あの留学生が来てからもう三ヶ月になる。

他出门十分钟了。／彼は出かけてからもう十分経った。

他下去（／下乡）八年了。／彼は田舎に行って八年になる。

ほんとうに移動時間を表現したければ「用」などを借りて別の動詞句をつくらなければならない。

昨天去他家用了一个半小时。／昨日彼の家に行くには一時間半かかった。

また「離れる」という意味としての「走」などを用いた文の中で補述される時間も移動終了時から発話時までの時間である。

他走了（／离开这里）两个小时了。／彼はここを離れてからもう二時間経った。

四

移動軌跡の一点を補述できることは、中国語の移動動詞の特徴である。その一点の位置によって、移動動詞は<到着型>と<出発型>と<通過型>に分けられる。その一点を顕在化するのが移動表現の原則となるが、「从」のような語彙を加えれば、<到着型>移動動詞を用いた文なら移動軌跡を拡張表現できる。

<通過型>以外の移動動詞は方向性を包入している。そのなかで「来」と「去」はその方向性が話者の視点を基準にする。もし「来」と「去」を主観移動動詞と称すれば他の移動動詞を客観移動動詞と称することができよう。主観移動動詞を客観移動動詞の後につけて複合することができる。

移動動詞を用いた移動表現は、一瞬の現象としてとらえられている。そこにはもはや移動の距離や時間の表現が入る余地はあるまい。

実際、移動動詞の前に移動様態を描く動詞を置いて表現するパターンは多い。一方で移動様態動詞も移動を表現するために移動動詞と組まなければならない。なぜならば、移動様態動詞は移動軌跡も方向性も包入していないからである。

移動様態動詞を用いた文で、「向」のような語彙を加えて到着点（方向）を明確にし、或いは移動距離か時間を補わせることによって移動を表現することもできる。

移動様態動詞は、移動能力を潜めているからこそ移動表現を可能にするという見地から、動詞の移動様態としての側面だけでなく、移動としての側面にも気を配りながらおのおのの動詞を上手に使わなければならない。

〔注〕

- (1) 中国では普通「趨向補語」という術語を用いる。「趨向」は「方向」の意味をもつ名詞である同時に、「～に向かって移動する」という意味をもつ動詞でもある。
- (2) 田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』（日英語比較叢書⑥）128 p、1997、研究社出版。筆者はこの本から多くのヒントを得ている。
- (3) 「請進」の原形は「请你进来」か「请你进去」であろうと考えられる。
- (4) 中国語のテキストはほとんど例外なく「过」を方向補語（動詞）としてとらえている。
- (5) 移動動詞「下」は<到着型>と<出発型>との二つのタイプがある。「出」は<出発型>のみであるが、ただ到着点をとる「出台／登場する」「出場／出場する、登場する」のような慣用語なら若干ある。
- (6) 文尾の「来」「去」を趨向助詞と名づける意見は前からあった。繆錦安『汉语的语义结构和补语形式』（1990、上海外語教育出版社）をご参照。
- (7) 「经过」「从」及び下文中移動様態動詞を論ずるときにとりあげた「向」などは普通、前置詞と呼ばれる。ただ筆者は前置詞を先導動詞の一種としてとらえている。詳細は拙稿「反補語論—先導動詞の提唱—」（「法政大学教養部紀要」第103号、1992.2）をご参照。
- (8) 例えば、劉月華主編『趨向补语通释』（1998、北京語言文化大学出版社）では「到」を方向補語（動詞）としてとらえている。
- (9) 「往」は移動性をもつ動詞と認められるが、しかし現代中国語の中で用例は極めて少ない。例えば「来往／往来する」「人来人往／人が行き来する」「前往／赴く」などである。